

## 歴史

住吉大社は、大阪港と、そのさらに内陸にある奈良や京都などの古都を精神的に守っている。創建以来約2000年の間に、君主や歌人、船乗りや商人など、多くの人々が信仰してきた。

住吉大社は、211年に夫の死後、日本を統治していた神功皇后によって創建されたとの伝承がある。神功皇后は住吉三神と呼ばれる底筒男命、中筒男命、表筒男命の海の神々を祀った。これらの神々の名前には「底」「中間」「表面」を意味する言葉が含まれており、それぞれの神が海の奥深くに位置していたことを表している。また一説には航海士が利用したオリオン座の帯にある3つの明るい星を表しているとも言われている。神功皇后は亡くなられた後、住吉大社で「気長足姫尊（おきながたらしひめのみこと）」という神様として祀られた。

住吉大社は大阪湾の岸辺に建っていたが、自然の堆積物や埋め立てにより、徐々に岸辺が西に移動していった。7世紀から9世紀にかけて、神社の近くにあった難波津は、アジア大陸との貿易や外交の出発点となった。その後、江戸時代（1603-1867）には、大阪港は、日本の中央部と日本海側の沿岸地域を結ぶ重要な国内の交易路の拠点となった。

住吉大社の信仰の対象は、当初の海の神から、長い年月を経てさらに拡大していった。詩歌、芸能、相撲、商売繁盛、恋愛成就などのご利益があるとされている。大阪人が親しみを込めて呼ぶ「住吉さん」は、昔話から近現代文学まで、日本の多くの物語に登場する。境内には、この神社を舞台にした短編物語を書いたノーベル賞作家、川端康成（1899-1972）の記念碑がある。

住吉大社の主な建物は、シンプルであることが特徴である。住吉大社の主要な建物は、アジア大陸から凝った建築物が入ってくる前の、直線的な切妻屋根などのデザインが施されたシンプルなものである。この様式は「住吉造り」と呼ばれ、日本の神社建築の模範となった。

元々住吉大社の4つの本宮は、20年ごとに建て替えられていた。しかし、16世紀の内乱で中断され、19世紀初頭にはその慣習は完全に放棄された。現存する4つの本宮は1810年に建てられたもので国宝に指定されている。また、17世紀初頭に完成した石舞台をはじめ境内の多くの建造物が重要文化財に指定されている。